

妙法蓮華經安樂行品第十四（続きー 7月8日テキスト）

（いつも安らかな気持ちで進んで法を説く為の基本的な心得）

（250 頁 8 行～257 頁 5 行）

又文殊師利、菩薩摩訶薩後の末世の法滅せんと欲せん時に於て法華經を受持することあらん者は、在家・出家の人の中に於て大慈の心を生じ、菩薩に非る人の中に於て大悲の心を生じて、是の念を作すべし、是の如き人は則ち為れ大に如来の方便随宜の説法を失えり。

聞かず知らず覺らず、問わず信ぜず解せず。其の人は是の經を問わず信ぜず解せずと雖も、我阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、随つて何れの地に在つても、神通力・智慧力を以て、之を引いて是の法の中に住することを得せしめん。文殊師利、是の菩薩摩訶薩如来の滅後に於て此の第四の法を成就することあらん者は、是の法を説かん時、過失あることなけん。

常に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・国王・王子・大臣・人民・婆羅門・居士等に供養・恭敬・尊重・讃歎せらるることを為ん。

虚空の諸天、法を聴かんが為の故に亦常に随侍せん。若し聚落・城邑・空閑・林中に在らんとき、人あり来つて難問せんと欲せば、諸天昼夜に常に法の為の故に而も之を衛護し、能く聴者をして皆歡喜することを得せしめん。所以は何ん、此の經は是れ一切の過去・未来・現在の諸仏の神力をもつて護りたもう所なるが故に。

（250 頁 8 行～251 頁 10 行）

また文殊師利よ、菩薩大士が、未来の世において、正しい仏の教えが失われそうになっている時において、この經典の教えを銘記して忘れずにいようとする者は、在家の人や出家の人の中に於いて、大いなる慈しみの心をおこし、まだ菩薩ではない人の中においては大いなる憐みの心を起こして、次のように思うでしょう。

「この様な人は、まさに如来が相手に応じて説かれる巧みな教えを見失い、聞こうとせず、知ろうともせず、気づきもせず、問おうともせず、信じようともせず、理解しようともしない。その人が（今）この經を問わず、信ぜず、理解しないとしても、私が一切の眞理をあまねく知り最上の智慧を得たときには、どこにいたとしても、神通力と智慧力によって彼らを引きつけて、この教えの中に留まる事ができるようにしよう。」と。

文殊師利よ、この菩薩大士が、如来が世を去った後に、この第四の教えを成就する者があれば、この教えを説くとき過失があることはないであろう。

常に出家の男女・在家の男女・国王・王子・大臣・人民・婆羅門・有力者らに供養され、恭しく敬われ、尊重され、讃嘆されるでしょう。

虚空の諸々の天人は、教えを聴くために常に後について仕えるだろう。

もしも、村や都市や人里離れた修行に適した場所や林の中にいるときに人がやって来て難しい質問をしようとしたなら、天人達は昼夜常に教えの為に付き添い守り、聴く者に皆よく歡喜することを得させるであろう。理由は何故かという、この教えは一切の過去・現在・

未来の諸仏の神通力によって守られているからである。

文殊師利、是の法華經は無量の国の中に於て、乃至名字をも聞くことを得べからず。何に況や見ることを得受持し読誦せんをや。

文殊師利、譬えば強力の轉輪聖王の、威勢を以て諸国を降伏せんと欲せんに、而も諸の小王其の命に順わざらん。時に轉輪王種々の兵を起して往いて討伐するに、王、兵衆の戦うに功ある者を見て即ち大に歡喜し、功に随って賞賜し、或は田宅・聚落・城邑を与え、或は衣服・嚴身の具を与え、或は種々の珍宝を金・銀・瑠璃・磲磔・碼碯・珊瑚・琥珀・象馬・車乘・奴婢・人民を与う。唯髻中の明珠のみを以て之を与えず。

所以は何ん、独王の頂上に此の一つの珠あり。若し以て之を与え、王の諸の眷属必ず大に驚き怪まんが如く、文殊師利、如来も亦復是の如し。禪定・智慧の力を以て法の国土を得て三界に王たり。而るを諸の魔王肯て順伏せず。

如来の賢聖の諸将之と共に戦うに、其の功ある者には心亦歡喜して、四衆の中に於て為に諸經を説いて其の心をして悦ばしめ、賜うに禪定・解脱・無漏根・力の諸法の財を以てし、又復涅槃の城を賜与して、滅度を得たりと言つて其の心を引導して皆歡喜せしむ。而も為に是の法華經を説かず。(251 頁 10 行～252 頁 12 行)

文殊師利よ、この法華經は、数え切れないほど多くの国の中においても、その名すら聞く事は出来ないものです。まして、それを見て教えを銘記して忘ず読誦することなどは尚更のことなのです。

文殊師利よ、例えば、強力な轉輪聖王が、人を恐れ従わせる力によって諸国を降伏させようとするとき、小王達はその命令に従わなければ、その時に轉輪聖王は、種々の兵を起こしてそこに行き討伐します。王は兵士達の中で、戦いに勲功のある者を見て大いに歡喜して功に随って賞を授けるでしょう。或いは田や家や村や町や都市を与え、或いは衣服や身を飾る装飾品を与え、或いは種々の珍宝・金・銀・瑠璃・シャコ・メノウ・珊瑚・琥珀・象・馬・乗物・召使いの男女・人民を与えるでしょう。しかし、髪の手を頭上に集めて束ねたところの中にある透明で曇りのない宝玉のみは、ただ唯一与えないでしょう。

理由は何故かという、それは独り王の頭上にのみ、このたった一つの珠があるからです。もしこれを与えたならば、王の諸々の一族の者は、必ず大いに驚き怪しむように、文殊師利よ、如来もまた、それと同じなのです。

精神を集中し三昧に入り寂靜の心境に達し智慧の力によって、教えの国土を得て、欲界・色界・無色界の三つの世界の王となる。しかし、諸々の仏道修行や善事を行おうとする気持ちを妨げる天魔の王は、あえて従わず降参もしません。

如来は、仕える賢者の諸将と共に戦いますが、その中で勲功ある者には、心に歡喜して、出家の男女と在家の男女の中で、そのために諸々の經を説き、その心を喜ばせます。禪定・解脱・煩惱のない五つの感覚器官の働きと悟りに至らせる五つの力という諸々の教えの財産を授け、涅槃の城を見せて、生死の迷いを超越した悟りの境地を得たと言つてその心を導いて、皆歡喜させます。しかし、その為はこの法華經を説く事はありません。

文殊師利、轉輪王の諸の兵衆の大功ある者を見ては心甚だ歡喜して、此の難信の珠の久しく髻中に在って妄りに人に与えざるを以て、今之を与えんが如く、如来も亦復是の如し。三界の中に於て大法王たり。法を以て一切衆生を教化す。

賢聖の軍五陰魔・煩惱魔・死魔と共に戦うに大功勲有って、三毒を滅し、三界を出でて魔網を破するを見ては、爾の時に如来亦大に歡喜して、此の法華經の能く衆生をして一切智に至らしめ、一切世間に怨多くして信じ難く、先に未だ説かざる所なるを而も今之を説く。

文殊師利、此の法華經は是れ諸の如来の第一の説、諸説の中に於て最も為れ甚深なり。最後に賜与すること、彼の強力の王の久しく護れる明珠を、今乃ち之を与うるが如し。

文殊師利、此の法華經は諸仏如来の秘密の蔵なり。諸經の中に於て最も其の上にあり。長夜に守護して妄りに宣説せざるを、始めて今日に於て乃ち汝等がために而も之を敷演す。

(252 頁 12 行～253 頁 11 行)

文殊師利よ、轉輪聖王が、兵士達の中の大功ある者を見て心は甚だ歡喜して、この信じ難いほど貴重な宝珠は久しく髻の中にあって、みだりに人に与えなかったが、今これを与えようとしている様に、如来もまた、それと同じなのです。欲界・色界・無色界の三つの世界の中において、大いなる教えの王であって、教えによって一切の衆生を教化します。

賢者・聖者の軍が、物質感覚、感受作用、概念化作用、形成作用、識別作用の五つの作用が煩惱や苦しみの元に成っている状態（五蘊魔）や、食欲、瞋恚、愚痴などの煩惱が、人の心身を悩ませ、善行を妨げる状態（煩惱魔）や、肉体的な死や、精神的な死による意欲の喪失の状態（死魔）と戦って大きな勲功があり、食欲・憎悪・無智の三毒を滅ぼし、欲界・色界・無色界の三つの世界を出て悪魔を打ち破るのを見て、その時に、如来もまた大いに歡喜して、（本来）この法華經は衆生を完全なる仏の悟りへと至らしめることができるものですが、一切の世間には敵意を持つものも多く、信じることも困難なので、今まで説いたことも無かったのですが、これを敢えて今、説くのです。

文殊師利よ、この法華經は、諸々の如来の説かれた第一の教えであり、諸々の説かれた教えの中で最も深遠なのです。最後に授け与えられる理由は、かの強力な轉輪聖王が長い間大事にしてきた透明で曇りのない光り輝く宝石を今与えるようなものだからです。

文殊師利よ、この法華經は、諸仏如来の秘密の蔵であるから、諸々の經典の中で最も上にあるものです。衆生が煩惱のため悟りが開けず生死の境界にさまよう間も守護して妄りに説かなかったのを、はじめて今日、貴方達の為に、例などをあげて詳しく説明するのです。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言わく、

常に忍辱を行じ 一切を哀愍して 乃ち能く 仏の讃めたもう所の經を演説す 後の末世の時に 此の經を持たん者は 家と出家と 及び非菩薩とに於て 慈悲を生ずべし 斯れ等 是の經を聞かず信ぜず 則ち為れ大に失えり 我仏道を得て 諸の方便を以て 為に此の法を説いて 其の中に住せしめん 譬えば強力の 轉輪の王 兵の戦う功あるに 諸物の 象馬車乗 嚴身の具 及び諸の田宅 聚落城邑を賞賜し 或は衣服 種々の珍宝 奴婢財物を与え 歡喜して賜与す 如し勇健にして 能く難事を為すことある

には 王髻中の 明珠を解いて之を賜わんが如く 如来も亦爾なり 為れ諸法の王 忍辱の大力 智慧の法蔵あり 大慈悲を以て 法の如く世を化す 一切の人の 諸の苦悩を受け 解脱を欲求して 諸の魔と戦うを見て 是の衆生の為に 種々の法を説き 大方便を以て 此の諸經を説く 既に衆生 其の力を得已んぬと知っては 末後に乃ち為に 是の法華を説くこと 王髻の 明珠を解いて之を与えんが如し 此の經は為れ尊衆經の中の上なり 我常に守護して 妄りに開示せず 今正しく是れ時なり 汝等が為に説く (253 頁 11 行～255 頁 3 行)

その時に、世尊は、重ねてこの意義を述べようとして、仏徳を賛歌して詩を説いて言われました。

常に侮辱や苦しみに耐え忍び心を動かさず この世に生を受けたすべての生き物を悲しみ哀れんで そしてよく 仏の讃嘆されるこの經を説くのです 入滅後の仏法の衰えた世に この經の教えを銘記して忘れない者は 在家者と出家者と 悟りを求める修行者でない者に対して いくしみ哀れむ心を越こすのです これらの人々はこの經を聞こうとも信じようとしめない それはつまり大きな機会を失ったのである私が仏道を得て 諸々の衆生を済度に近づけるための巧みな方法によって それによってこの教えを説き その中に変わらず留まるようにさせよう 例えば強力な 轉輪聖王は 兵が戦いにおいて勲功があれば 諸々の物を与える 象・馬・車・乗物 身を飾る装飾品 および諸々の田や家 村や都市を賞として与える 或いは衣服 種々の珍宝 召使いの男女や財物を与え 歡喜して与える しかし、もし勇ましく健やかで処理するのが困難な事柄をよくこなした者には 王は髻の中の 透明で曇りのない光り輝く宝石を解いてこれを授ける様に 如来もまたその通りである 如来は諸々の教えの王である 侮辱や苦しみに耐え忍ぶ大いなる力と 智慧の教えの蔵があつて 大慈悲心をもって 教えに従つて世の人を教化します 全ての人が 諸々の苦悩を受け悩みや迷いなど煩惱の束縛から解き放たれて自由の境地に到達することを求めて 諸々の悪魔と戦うのを見て この生命のあるものすべての為に 種々の教えを説き教化救済するために用いるさまざまな方法を用いて この諸々の經を説くのです 既に生命のあるものすべてが その力を得た事を知ると 最後にその人々の為に この法華經を説くことは 王が髻の中の 透明で曇りのない光り輝く宝石を解いてこれを与えるのと同様です この經は尊ばれ 全ての經典の中で最上なのです 私は常に守護して 妄りに説き明かし示すことはしません 今は正しくその時です 貴方達の為に説きましょう

我が滅度の後に 仏道を求めん者 安穩にして 斯の經を演説することを得んと欲せば 応当に 是の如き四法に親近すべし 是の經を読まん者は 常に憂悩なく 又病痛なく 顔色鮮白ならん 貧窮 卑賤醜陋に生れじ 衆生見んと樂うこと 賢聖を慕うが如くならん 天の諸の童子 以て給使を為さん 刀杖も加えず 毒も害すること能わじ 若し人惡み罵らば 口則ち閉塞せん 遊行するに畏れなきこと

師子王の如く 智慧の光明 日の照すが如くならん 若し夢の中に於ても 但妙なる事を見ん 諸の如来の 師子座に坐して 諸の比丘衆に 圍繞せられて説法したもうを見ん 又龍神 阿修羅等 数恒沙の如くにして 恭敬合掌し 自ら其の身を見るに 而も為に法を説くこと見ん 又諸仏の 身相金色にして 無量の光を放って 一切を照し 梵音声を以て 諸法を演説し 仏四衆の為に 無上の法を説きたもう 身を見るに中に処して 合掌して仏を讃じ 法を聞き歡喜して 供養を為し 陀羅尼を得 不退智を証す 仏其の心 深く仏道に入れりと知しめして 即ち為に 最正覺を成ずることを授記して 汝善男子 当に來世に於て 無量智の 仏の大道を得て 国土嚴淨にして 廣大なること比なく 亦四衆あり 合掌して法を聴くべしとのたもうを見ん 又自身 山林の中に在って 善法を修習し 諸の実相を証し 深く禪定に入つて 十方の仏を見たとまつると見ん 諸仏の身金色にして 百福の相莊嚴したもう 法を聞いて人の為に説く 常に是の好き夢あらん 又夢むらく国王と作つて 宮殿眷属 及び上妙の五欲を捨てて 道場に行詣し 菩提樹下にあつて 師子座に処し 道を求むること七日過ぎて 諸仏の智を得 無上道を成じ已り起つて法輪を轉じ 四衆の為に法と説くこと 千万億劫を経 無漏の妙法を説き 無量の衆生を度して 後に當に涅槃を入ること 煙尽きて燈の滅ゆるが如し 若し後の惡世の中に 是の第一の法を説かば 是の人大利を得んこと 上の諸の功德の如くならん

(255 頁 3 行～257 頁 5 行)

私が世を去った後に 仏道を求める者が 安穩に この經を大勢の前で説きたいと思うなら 当然 このような四つやり方に従うのがいいでしょう この經を読む者は常に憂いや悩みがなく また病氣や痛みもなく 顔色も白く鮮やかで 貧窮して 卑しく醜い姿になって生まれることもないでしょう 衆生たちが彼を見たいと願うさまは あたかも賢者や聖者を慕うようでしょう 天人の諸々の童子は そばに仕えるでしょう 刀や杖は触れることもできず 毒も害する事はできないでしょう もし人が惡口で罵ったなら その口は閉じてふさがれるでしょう どこを訪ねても畏れないさまは 獅子王のようであり 智慧の光明は 太陽が照らすようになるでしょう たとえ夢の中でも ただ素晴らしいことのみを見るでしょう 諸々の如来が 師子座に坐つて 多くの比丘らに 周りを囲まれて教えを説いているのを見るでしょう また龍神や アシュラなど 数はガンジス河の砂の数の如く多く 恭しく敬い合掌しているのを 自分でよく見てみると 正に彼らの為に教えを説いている自分自身の姿を見るでしょう また諸仏は 身体の姿が金色であり 無量の光を放って 一切を照らし 清らかな音声によって 諸々の教えの道理や意義を説き明かし 仏が出家の男女や在家の男女の為に 無上の教えを説いているなかで 自分の姿を見てみれば その中にあつて 合掌して仏を讃え 教えを聞き歡喜して 供養をなして 仏の説くところをよく記憶して忘れない陀羅尼を得 仏道修行の過程で すでに得た境地から後戻りしない智慧を証明しているでしょう 仏はその心が 深く仏道に入ったと知つて その為

に未来世の成仏の証言を与えるでしょう 真の悟りを完成するであろうと 仏法に帰依した男子よ まさに未来世において 無量の智慧ある 仏のすぐれた教えを得て 国土はおごそかで汚れなく 広大なこと比べるものもなく また出家在家の男女の仏弟子があり 合掌して教えを聴くのを見 また自分が 山林の中にあつて よい教えを習い身につけ 諸々の真実の本性を証明し 深く冥想に入つて 十方の仏を見奉るのを見 諸仏は身体が金色であり 百の福相に飾られている 教えを聞いて人の為に説いている 常にこのようなよい夢を見るであろう また夢の中で国王となり 宮殿や一族の者や 優れた財欲・色欲・飲食欲・名誉欲・睡眠欲を捨てて 道場に行き 菩提樹の下にある 獅子の座に座り 道を求めて七日を過ぎて 諸仏の智慧を得 この上ない道を完成し終つて 立つて仏の教法を説き 四種の仏弟子の為に教えを説く 千万億劫を経て 煩悩のない優れた教えを説き 無量の衆生を迷いから救う その後 永遠の平安に入るさまは 煙が尽きて燈火が消える様である もしも、後の仏法の衰えた時代の中において この第一の教えを説くなら この人が大いなる利益を受けることは 上記の諸々の功德の通りでしょう